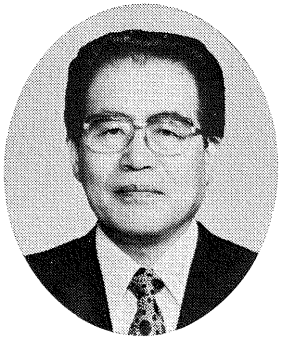
序

文

村誌発刊によせて



山梨県知事　望　月　幸　明

鳴沢村は、南は富士山頂から北は足和田山に至る富士北ろくの大地に、多くの先人たちのたゆまぬ努力によって築かれた素晴らしい高原の村であります。

富士の火山灰と溶岩流の上に発展したこの村の歴史は、その成り立ちの過程によっても明らかなとおり、富士山とともに形づくられてきたと言ってもよいでしょう。古来からこの地の人々は富士山を稼業の場として生計を立て、あるいは広大な土地を耕して生活の糧を得てきたのであります。

そしていま、鳴沢村は国の天然記念物にも指定されている青木ヶ原樹海や鳴沢氷穴などの豊かな観光資源に加え、ゴルフ場やスキー場も備えた観光の村として、また高原の冷涼な気候を生かした酪農や高原野菜の栽培を中心とした近代農業の村として、さらには誘致企業による半導体製造装置の製作など先端技術産業の村としても、飛躍的な発展を遂げようとしております。

村政も〝いのちと健康を守る人間社会の確立〟を基本テーマに、二十一世紀を展望したふるさとづくりを着実に進められており、富士北ろくの素晴らしい自然環境を活用した数々の施策の展開は本村の一層の発展に拍車をかけるこ

と思います。

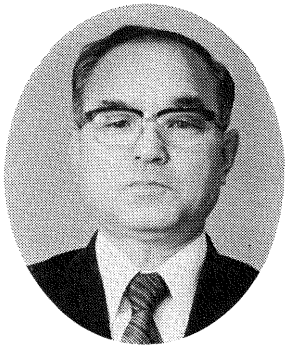
このように新しい時代が展開されようとしている今、立派な村誌が発刊され、鳴沢村の遠いむかしから今日まで、この地に生きた人々の息づきが、永遠に残されることになったことは喜びにたえません。

本誌は村の人々にはもちろん、県内外の人たちにも鳴沢村の素顔と躍動する姿をこまごまと語り伝えてくれることでありましょう。

この村誌の発刊にあたり、関係各位の御努力に対し心から敬意を表しますとともに、本誌が広く活用され、鳴沢村がますます発展されることを心から念願するものであります。

昭和六十三年一月

村誌発刊にあたって



鳴沢村長　小林美知

私たちは自分の生いたちや周りのことを十分に知りたいという、本能のような願いをもっていますが、それと同様にわが生まれ育ち生活している鳴沢村をも、広く深く知りたい願望があります。

ところが今までに村政要覧は別として、村の全容を総括した資料を作る機会がありませんでした。それが戦後の混乱から安定・成長へと動く日本の中で、富士山、東京に近い、村の広さ等々の条件で、村が大きく変わることになってみますと、素朴な知りたい願い以上に、あらためて村の過去を掘りおこし、現状を客観的に再認識する必要が生まれてきました。村成立百周年記念の意味もあって村誌を作ることを決定しました。

県内既発行の市町村誌全部を取り寄せて議員さん全員で検討するなどの経緯もあって、執筆刊行の一切を、経験実績共に豊富な山梨日日新聞社企画局出版部に委託、短期集中的にまとめる態勢を整えました。

以来執筆の先生方の頻繁なご来村、丹念周到な取材や研究が続く一方、村内所蔵の古文書その他のご提供、村の生活を語るお年寄りのご協力、村外の識者各位など多くの方々のお力ぞえを得てほぼ予定通り進行、この間出版部へは多大なご無理もお願いしました。知事さんから序文もお寄せいただきました。

こうして刊行が進んでいる最中の昨年十一月二十日、第二回県民の日に、鳴沢村は山梨県知事から県政功績者賞を受けました。賞状は「貴村は発足以来積極的に諸施策を推進され各行政分野に大きな成果をあげられました。その功績はまことに顕著でありますので表彰します」というものでした。これによりますと、明治二十二年六月、町村制施行による鳴沢村発足以来百年間の実績を認め、褒めていただいたことになります。まことに意義深く、重みのある、得難い賞をいただいたものと深く感動しました。村誌にはここ百年来の私らの先輩の活躍のようすもいっぱい載っていますが、時を同じくしての受賞は、これら先人の業績に一層の輝きを添えるものとなったわけです。

鳴沢村には貞観六年の富士山大噴火が、実は村内の長尾山の噴火で、青木ヶ原という日本屈指の溶岩流を作り、村名の由来も埋没した地形の関連で考えられるなど、多くの話題がありますが、人々は高冷地のやせ土の上で苦闘して生きてきました。その実態はこの本の随所に出てきますが、過去の村民の生き方は、現在の村の実態に及び、更に将来への示唆・提言にもなっております。村の皆さんが村誌全体に目を通され、村の歴史、現状をお知りになり、将来へ思いをはせていただけたら幸いです。

昭和六十三年一月